銭湯内における挨拶や会話の要因と社交性

学生 ID：1109181042

氏名：丸山夏実

指導教員：立木茂雄

本文の総文字数：20603 字

目次

第 1 章　はじめに.....1
第 2 章　研究対象地域.....2
2.1　社交の場としての京都市の銭湯.....2
(1)日本社会の中間集団の現状.....2
(2)地縁組織としての銭湯.....3
(3)京都市の銭湯と元学区.....4
第 3 章　先行研究.....5
(1)社交性.....5
(2)ソーシャル・キャピタル.....6
(3)共同性.....7
(4)無縁社会.....8

第 4 章　調査方法.....9
4.1　調査概要.....9
4.2　調査対象.....10
4.3　調査方法.....11
4.3.1　調査を行う上での注意.....11
(1)交絡因子.....11
(2)ラポールの形成.....12
(3)調査する上で注意した事.....12
4.4　ログの収集・分析方法.....13
第 5 章　調査結果.....14
第 6 章　考察.....17
6.1　挨拶や会話が生まれる要因.....17
4.2　常連さんによる新入りさんの受け入れ.....23
第 5 章　おわりに.....28
参考文献リスト.....29

要旨

論題　銭湯内における挨拶や会話の要因と社交性

学籍番号：1109181042

氏名：丸山夏実

本稿は、銭湯内における挨拶や会話の要因と社交性をテーマとし、銭湯内で行われているコミュニケーションはどのように生まれているのか、銭湯内で見られる社交性についてまとめた論文である。近代化により個人主義化し、中間集団の縛りが薄くなっている現代において、銭湯では地縁組織として今も盛んにコミュニケーションが行われている。挨拶や会話をする関係性を形成するための要因はどのようなものであるのかを探る為に調査を行った。本調査では、銭湯内でのお客さんの様子やお客さん同士の会話、行動を観察する為に、実際に著者がお客さんとして銭湯に通う参与観察を行った。観察した事をメモに取りそれをログとしてデータ化しその中からキーワード抽出した。そのデータによると、会話が生まれる要因として「挨拶をするという行為」と「会話を回す人の存在」があげられた。また、お客さんによる独自のルールが存在する事や人と会話をする事を銭湯に来る楽しみとしている事などから、銭湯という場に社交性が生まれている事を示していた。

［キーワード］銭湯、ソーシャル・キャピタル、社交性

1　はじめに

社交性とは人と共にいる事そのものを楽しむ性質、能力であり、人々の間の相互作用の中で一定の決まりや形式を持った結びつきを中心に展開し、当人がそれを生み出し密接に関与するという考え方である。人の集まりそのものに価値が見いだされている場合にその目的を実現するために「思慮と様式化」が生み出される。それが人と人とが関わる中での「暗黙のルール」となるのだ。本研究の調査の中で「暗黙のルール」を複数発見する事が出来た。その事が調査対象に社交性を成立させる要因になっているのかを考察していきたい。

調査対象は京都市内の銭湯とした。銭湯は、職場、飲食店、自治体などの他の中間集団とは異なる特徴を持っているからだ。例えば、銭湯に行くとよく見られるのは客同士が話をしている光景だ。銭湯の特徴としてあげられるのは、客同士の関係性が店側によって提供されるものではなく客が自主的に行っているということだ。また、その団結が祭りなどの行事や自治体のように課題解決や目標達成のために行われるものではなく、快適に銭湯を利用する為に生まれたものであることも特徴的であると考えることができる。銭湯は公衆浴場として国家から定められた決まりがあり、大まかなルールは全国共通である。公衆浴場であるから、客が限定させることもなく常連、新入り、老若男女多様な人が来店する。その中でも銭湯ごとにルールや常連さん同士の雰囲気、常連さんの一見さんに対する態度は少しずつ異なっている。それは銭湯が公衆浴場としてのフォーマットがありながらも、地域性や自主性が表れているからだろう。社交が成り立っているからこそ「無縁社会」の現代においても銭湯が中間集団の地縁の関係性を保つことが出来ていると言えよう。

本稿では、京都市内の銭湯における挨拶や会話などのコミュニケーションがどのような事が要因で成り立っているのか、銭湯内でのコミュニケーションには社交の成立条件が存在するのかを実際の銭湯で行ってきた参与観察をもとに見ていきたい。第２章では、日本の中間集団の関係性の変化と現状、銭湯の交流の場としての役割について先行研究と共に説明していきたい。また、社交性や共同性についても社会学の観点から考えていきたい。第３章では、実際に行った参与観察の調査対象や調査方法などの概要を説明する。第４章では、

調査から得られたログから見えて来たルールや傾向を述べ、それが生まれる要因についてもまとめ、考察していきたい。

2　研究対象地域

2.1　社交の場としての京都市の銭湯

⑴日本社会の中間集団の現状

日本社会は近代化により人と人との関係性が変化してきた。人と人との関係性において言えば、近年では新型コロナウイルス感染症流行の影響で人と人とが直接会う機会が減り、それにより関わる機会自体が減ってしまっている。女性や若者の自殺などが社会問題化している。そういった状況下で、政府は孤独・孤立問題の対策室を立ち上げるという動きが出てきている。今回の新型コロナウイルス感染症による孤独、孤立感が取り上げられる以前からも、孤独死や育児の孤立化は問題になっていた。それ以外にも、いじめや DV の被害者が思い詰めてしまって、問題を表沙汰にできなかったり自殺という選択をしてしまったりすることにも孤独・孤立が関わってくると考えられる。その要因として考えられるのが、日本社会が社会的排除と親密圏の変容により「無縁社会」（石田　2011）となってきているということだ。近代化によって個人主義が浸透し、中間集団の関係の拘束が弱まり、親密圏が変容したのである。困ったことに直面した時に相談できる人や直接的な解決にならなくてもストレスが軽減する人がいたとしたら、当人の精神上の健康状態を保つことができるのではないだろうか。あらゆる社会問題は当事者を取り巻く環境が変化すれば、引き起こされる結果も変化するのではないか。こういった疑問から、人が心身の健康を保つことができる環境とそのような社交の場がどのようにして生まれるのかを考察したい。

人と人との関係性に着目する中で、中間集団の一つである地縁に着目したい。私自身の今の生活の中で地縁の薄さを感じており、大学進学とともに京都で一人暮らしをして、大学やサークル、アルバイト先で他者と交流することはあっても、買い物や外食、行事や自治会などで地域住民の方と接する機会がないことに気づいた。しかし、この状態は私だけではないだろう。近代化による個人主義の人間関係の自己選択性が増したことと、単身世帯数が上がってきたことによって地縁に拘束されなくなったのだ。現代において地縁が薄れてしまっている状況であるからこそ、住むところが近いというだけで老若男女多様な関りを持つことができ、また、物理的距離の近い地縁関係が構築されている様子を調査する意義があるだろう。

⑵地縁組織としての銭湯

地縁組織における社交性を観察するにあたって、調査対象を銭湯にしたのは銭湯には他の地縁組織と異なる特徴が二つあるからだ。一つ目は、銭湯に来る人々は自発的につながりを形成しているという点だ。自治体やボランティアなどの他の組織とは異なり団結し問題解決や目標達成をめざしている組織ではなく、生活上の必要な行動である入浴を目的とした人々が集まりつながりを形成しそこには参加義務が存在しないのだ。二つ目は、常連さんと新入りさんが共存しているという点だ。銭湯に入ったらそこにいる人となかよくしなければならないということも無いから、もし何もなければ誰とも話さずに上がることができる。中には初対面の人にも話しかける方もいるので、初めてでも交流の機会がある。銭湯は公衆衛生の観点から公共性の高い施設であるため、初めての人やそこに住む人しか入れないという決まりがない。そのため、何十年毎日通っている人もいれば、月に数回来る人、初めて来る人に上下関係や長となる存在はいないのだ。また、個人的な興味として、京都市内のいくつかの銭湯に行き、銭湯によって一見さんに対する常連さんの雰囲気やちょっとしたルールなどが異なっていたため、そこに地域性が表れていることが面白く感じられた。普段街を歩いたり買いもをしたりしても話しかけられたことがないのに、銭湯で一人でいると話しかけられることが多く、そこに銭湯独自のコミュニケ

ーションを感じることができたというのも銭湯を選んだ理由である。京都市中京区の井筒湯を選んだ理由としては、観光地になっているような銭湯ではなく昭和 25 年に創業し古くから地域に根付いているから。そして、銭湯のご主人がコミュニケーションを銭湯の醍醐味としているように、脱衣所での座れるスペースが広く、ご近所の方同士の交流が盛んであるからだ。

⑶京都市の銭湯と元学区

銭湯は一般公衆浴場の事であり、「温湯等を使用し，同時に多人数を入浴させるものであって，その利用の目的及び形態が地域住民の日常生活において保健衛生上必要なものとして利用される入浴施設」と定義づけられ、物価統制例の適用を受けている。入浴料金は 450 円に統一されており、スーパー銭湯などのその他の公衆浴場と異なり住民の公衆衛生を保つという役割を果たしている。その為、緊急事態宣言下でも感染予防対策を講じながら営業を行っていた。感染予防対策として、大人数での来店の自粛喚起や黙浴の推進が行われていた。京都市内には 2019 年時点で私営の公衆浴場が 145 件存在し、政令指定都市の中では大阪市に次いで 2 番目に銭湯の多い地域である。

京都における元学区とは現在でも用いられる地域区分の事で、区よりも小さい範囲の地域を表している。元学区は番組小学校を起源としており、1869 年に住民の自治組織であった番組をもとにつくられた小学校の学区の事である。現在でも元学区単位で自治会が開かれたり、回覧板や避難訓練などが行われている。また、行政調査も元学区単位で集計されていて、元学区ごとの人口や高齢者率が分かるようになっている。中京区内には 23 の元学区が存在している。

3　先行研究

⑴社交性

社交性とは、人と人とが相互作用の一定の決まりや形式を持ちながら、その結びつきを中心に展開していくものであり、相互作用を行っている人自身がその結びつきを生み、密接に関与している。その根本には人と共にいる事そのものを楽しむ性質や能力がある。社交性の社会学的研究には理論的・概念的研究と社交現象の経験的研究がなされてきた。理論的・概念的研究では、G.Simmel の社交性論の議論がヨーロッパからアメリカへと展開していき、E.Goffman の『出会い』の中に社交性を見出す事が出来る事が言える。社会学としての社交性を扱う上でこの 2 人の社交性に対する議論を見ていきたい。

G.Simmel は 1917 年の『社会学の根本問題』の第 3 章の中で社交性論を取り扱っている。社会を人々の相互作用とし、社交性を相互作用に形式は個々人の衝動や目的を実現するためのシンボルとした。ここで言う衝動とは社交性衝動の事であり、人の集まりそのものに価値を見出す積極的感情の事である。このような積極的感情の実現のための手段として社交性が用いられるが、当事者は積極的感情を実現する事そのものが社交性の目的となる事がある。手段であった社交性が目的になるという軸の転回が社交性の概念の中にみられる。この軸の回転と社交性衝動が一定の決まりや形式そのものを成立させている社会自体が社交的社会である。社交性はこのような個人の満足を満たす事が達成されいればいい一方で、礼節感情が重視される。自分が集団に対し社交的価値を見出す事が出来る分、他者に対しても同様の価値を与えなければならないからだ。純粋にその集団の場の関係を価値づけるからこそ、個々人の社会的地位や能力などの個人的な部分が入り込んではならない。社交はこのような「思慮と様式化」が基にあって成り立っているのだ。このような社交性の世界は「単に現実の重みや負担が取り去られ、自然的存在の人間に戻るわけではなく、『思慮と様式化』を要請して、あたかも社交参入者が相互に同じ価値を獲得して、相互に尊敬するかのようにふるまわなければならない」(田村　2020)のである。

E.Goffman は 1961 年の'"Fun in Games." Encounters'（『ゲームの面白さ』出会い）の

中で、ゲームを行う動機は面白さだけであるとした。面白さを中心とするという事は、その場の面白さつまりその場の関係そのものに価値を見出し、それが目的となっている社交と同じである。このような面白さを成立させる形成化の為の条件として「個人の特性と無関連である事」「場の中で合意に基づいた出来事と役割がある事」「場の中で個人の特性が変化する事」があげられる。これらの条件は Simmel の社交性における「思慮と様式化」と同じ意味を持つ事から社交性論である事が分かる。

また、社交性の成立条件として 3 つの事があげられる。「①その場で生じている関係や状況そのものを目的とすること、②参与者が関係を生み出し維持することに伴う積極的感情、③やり取りの型の重視」(田村　2020)である。これは社交性が人が他の人といる事つまり人の集まりそのものを楽しむという原体験であり、その性質から整理された成立条件がある。社交性がどのように成立するのかはこれらの成立条件が実際に人々がとる行動の中に具体的に現れる事によって考察する事が出来る。

⑵ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルとは社会関係資本と訳され、様々な研究が行われてきた。R.D.Putnam はソーシャル・キャピタルが指し示すものは、「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」（Putnam 1995）と述べた。個人が自らの利益になるような関係性を形成する中で、双方向にコミュニケーションをとる為、利益の互酬性と相互関係の信頼性の規範が生まれるのだ。ソーシャル・キャピタルには個人的側面と集団的側面がある。個人間で利益を生むような繋がりを形成する一方で、ソーシャル・キャピタルの外部性は集団に広く影響し繋がりを生み出した個人に利益が返ってくるだけでなく、集団全体にも返ってくる。つまり、個人間の繋がりの強さと集団の繋がりの強さの両方が返ってくる利益の要因となるのだ。その利益は特定的な互酬性によるものもあれば、一般的互酬性の規範によるものもある。誰かが私に何かしらしてくれるだろうという事を確信しているから、特定の見返りを期待せずに

他者に何かしらをしてあげるという規範だ。強固な互酬性が存在し、行動ルールが守られ、双方向の義務を持った集団は、不信がみられる集団よりも効率よく活動する事が出来る。故に、ソーシャル・キャピタルは集団がスムーズに活動する為の潤滑油となるのだ。

ソーシャル・キャピタルには様々な形式のものがあり、”Briding”（橋渡し型）と”Bonding”（結束型）に分けられる。（Putnam 1995）結束型のネットワークは、「メンバーの選択や必要性によって、内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していく」ものであり、特定の互酬性を安定させる事が出来、連帯して動きやすい集団を形成する。対照的に、橋渡し型のネットワークは、「外向きで、様々な社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワーク」であり、外部との連繋や情報伝達をする上で優れている集団を形成する。「より広いアイデンティティや、互酬性を生み出すこと」ができるのだ。（Putnam 1995）これらの形式は、集団がどちらか一方だけの性質を持つのではなく、集団はどちらの傾向が強いのかというのを判断する事が出来るのだ。

⑶共同性

集団的主体の形成につながる共同性のとして、「洗練と成熟」が福祉コミュニティには内在することが取り上げられている。「洗練と成熟」は異質・多様性を認め合いながら「自覚的に洗練された新しい共同生活の規範、様式をつくること」（奥田・和田編　2003）である。コミュニティが形成される過程にはそれ自体が構成員同士を認め合い規範や様式が洗礼されることで成熟したコミュニティが出来上がるということだ。「人間関係のしがらみを背負った普通の人がふとしたキッカケから自発的に他者の〈生〉の欲求を満たす活動に参加するようになる。そういう複数の自発的活動が寄り合されると、自治的なコミュニティをつくりあげる」（黒田　2013）自発的に他者と関わるようになり相互に助け合うことで、その場での多様性を認め合った共同集団のアップデートがされていくのである。つまり、共同性は複数の人の自発的な他者との関りによって生まれ、新しい人を認め取り入れ集団内の様式が洗礼されている状態で保たれているものであると考えることができ

る。

(4)無縁社会

無縁社会の背景には社会的排除と親密圏の変容の二つの社会現象が内包されている。社会的排除は人間関係や地域、仕事、医療などの多元性と継続性をもっていて社会参加が困難になる状態で、このことは遠い話ではなく誰もがその危険性を持っているのだ。社会的排除の問題を無縁の問題として扱うのには「親密圏の変容」が関わっている。親密圏の変容の議論には中間集団（血縁、地縁、社会縁など）の崩壊を扱ったものが多い。現代の個人主義の浸透と自己選択制の拡大により人間関係の基盤であった中間集団の崩壊が指摘されている。今まで人々を拘束してきた既存の人間関係は解体は、「純粋な関係」(Giddens 1991)を増やした。それにより、個人の意思を重視するようになったため社会の拘束はより薄れるようになるのだろう。中間集団社会の拘束が薄れることによって、人々が自ら人間関係を自由に選んで構築するようになったのだ。こういった親密圏の変容がより中間集団のかかわりを薄めている要因としてあげられている。

4　調査方法

4.1 調査概要

銭湯内でのコミュニケーションの有無とその要因を観察する為に、私自身が実際に銭湯にお客さんとして通って観察するフィールドワークを行った。銭湯のお店の方やお客さんには調査のために観察している事は伝えず、銭湯に通い始めた新入りさんとして振る舞い、そこで見えてきた常連さん同士の態度や常連さんが新入りの私に向ける態度をメモし、ログとして記録していった。そのログをもとに、挨拶や会話がなされる要因や社交性が表れるような「暗黙のルールを」抽出した。このような参与観察を京都市の中京区の中の 2 か所の銭湯で行った。理由としては、京都市は全国でも比較的銭湯が多く一つ一つの銭湯の特色は異なるからだ。お客さんのほとんどが周辺に住む地域の方の所もあれば、観光地化している所もある。京都市内の様々な銭湯に行った際、お客さん同士の挨拶や会話などのコミュニケーションに違いを感じた。所在地による客層の違いや銭湯の運営方針の違いを比較基準に出来る事から 2 か所の銭湯で行った。観察していくうちに独自の暗黙のルールや共通しているルールが見えてきたため、それらもコミュニケーションの要因を考える上で要点となった。これらのコミュニケーションは主に常連のお客さんの間で起こることが多かったので、各銭湯各時間帯の常連さんの特色が見えて来た。このような違いを観察する為、場所と時間帯とを分けて調査した。銭湯の施設内でも番頭がいるスペース、更衣室、浴室、浴室の中でもシャワー、お風呂、サウナなどの場所によっての人の行動の違いが見えた為、場所ごとに分けて観察したログを作成した。

調査前半は、両銭湯の各時間帯による特色や傾向をデータ化していく為に、ランダムに振り分けた時間帯に訪れ、全体の動きを観察していった。社交による言動を発見した。調査後半では、話の聞ける人がいる時間帯を目指して訪れ社交による行動の背景や理由の聞き取り調査をした。会話が生まれる要因である「会話を回す人」の存在を発見したため、その観察を中心にどのように関係性が気づかれていったのか、暗黙のルールが出来ていったのかを会話の中で聞いた。

4.2 調査対象

京都市中京区内の 2 か所の銭湯、井筒湯と玉の湯で調査をした。両銭湯の番台前や女性用更衣室、浴室内でのお客さんを調査対象とした。

井筒湯と玉の湯の特色

表１　井筒湯と玉の湯の基本情報の比較

	井筒湯	玉の湯
所在地（元学区）	弁財天町（梅屋） 京都市営地下鉄丸太町駅徒歩6分	亀屋町（柳池） 京都市営地下鉄京都市役所前駅徒歩5分
元学区の人口（2022年10月1日）	3388人、高齢者率26.1%	4221人、高齢者率22.6%
番頭さん	60～70代の夫婦、小学生の孫がいる	60～70代の夫婦と30～40代の夫婦、小学生の子供がいる
番頭さんと客の関係	常連さんと常に会話、新しい客にも丁寧	常連さんと常に会話、新しい客にも丁寧で細かい説明付き
シャワーやお風呂の数	シャワー10、お風呂5コ、サウナ	シャワー12、お風呂5コ、サウナ
客層	高齢者が大多数	時間帯によって高齢者が多い時間、4.50代が多い時間がある

・井筒湯

井筒湯は梅屋元学区に所在し、最寄り駅は京都市営地下鉄烏丸線丸太町駅、近くには京都府庁や京都御所がある。木曜日以外の 15:00～23：00 に開いている。元学区内の人口は 3388 人で 23 区中 13 番目に人口の多い地区。地区内の高齢者率は 26.1%と比較的に高齢者が多い地区だ。元学区の自治会は 2012 年の記事によると「主にマンション建設に伴い新しく住民となられる方々とのふれあいをいかにすべきか協議」と記されており、古くから住む住民と新しい住民の関わり方が問題になっている。銭湯の設備や備品などは古くから使っているものをそのまま使用していて、昔ながらの銭湯を維持している。客層は高齢者の常連の方が多くみられる。

・玉の湯

玉の湯は柳池元学区に所在し、最寄り駅は京都市営地下鉄東西線京都市役所前駅、近くに

は京都市役所や寺町商店がある。日曜日以外の 15:00～24：00 に開いている。元学区内の人口は 4221 人で 23 区中 10 番目に人口が多い地区である。柳池元学区の自治会は 2012 年の記事によると 「同じ学区の人間に新しいも古いも関係ない」と打ち出しており、古くから住む住民と新しい住民とを分け隔てなく関わろうとする風潮がある。銭湯は 2021 年の 3 月にリニューアルオープンしており、初めて入る人にもわかりやすいように注意書きが貼っていたり、地元の他のお店とコラボイベントを開いたりと集客に様々な工夫をしている。客層は早い時間帯は高齢者が多く、時間が遅くなるにつれ 20、30 代の若い世代や子育て世代のお客さんも増えてくる。

銭湯の浴室の設備や規模はそう変わりないが、立地と集客方針に違いがあり客層がかなり変わってくる。

4.3 調査方法

二つの銭湯内で生まれるコミュニケーションとその要因を知るために、2021 年 1 月から 11 月にかけて計 62 回の参与観察を行った。銭湯のお店の人（番頭さん）、お客さんに調査をしている事は伝えずに私自身もお客さんとして入店した。お客さんの中でも他のお客さんと顔見知りで番頭さんに覚えられている常連さんもいれば、全く挨拶や会話が無く淡々と準備や入浴をする方、初めてまたはたまにしか来たことが無いような新入りさんがいる。常連さん同士の会話だけでなく、新入りさんと常連さんとのかかわり方や新入りさんが常連さんに覚えられ常連さんになっていく様子を観察し、社交性の有無や生まれる要因を考察していった。

4.3.1 調査を行う上での注意

(1)交絡因子

交絡因子とは調べようとする因子以外の因子で、求めたい因子以外に影響を与える因子を除かなければならない。2 か所の銭湯を比較しながら銭湯内でのコミュニケーションの要因を捜していくうえで、曜日や時間帯などの交絡因子を除く為に訪れる時間帯を分けてランダムに選び観察しに行った。井筒湯の営業時間を①15:00~17:00=早い時間帯、②18:00~20:00=夜の時間帯、③21:00~23:00＝遅い時間帯に分け、玉の湯を④15:00~17:00=早い時間帯、⑤18:00~20:00=夜の時間帯、⑥21:00~24:00＝遅い時間帯に分けた。毎回サイコロを振り出た目の数に合わせて①～⑥の時間帯に訪れた。（銭湯の定休日やどうしても予定が合わない日は振りなおす。）

(2)ラポールの形成

銭湯のお客さんを参与観察するという質的調査を行う上で、行動を観察するにもお客さんと会話をするためにもラポールの形成が必要になった。銭湯で会話が生まれていると言っても、銭湯は誰しもが入っていい空間である。その為、一人で来て一言も発さずに入浴して帰る事は間違っておらず、そういう人も多い。番頭さんや常連さんも全員に話しかけるという事はないので円滑に調査をするためには信頼関係の構築が必要である。そこで、私が銭湯で調査をする際は、

・出来るだけ自分から挨拶する（入る際も出る際も）

・話しかけられたら必ず答える

・ルールやおすすめの入り方などを教えてもらったら実践する

というルールを決めて調査を行った。

また、本調査では新入りである私が常連さん達に受け入れられていく過程、新入りさんが常連さんになっていく過程が表れている。ラポールの形成のためのルールを守る事により、常連さんと話す機会が生まれたり、常連さんに覚えたりするようになったのだ。

(3)調査する上で注意した事

2 か所の銭湯で複数の時間帯にわたって調査するにあたり、調査者である私は出来る限り

同じような態度でいる事にした。ラポールの形成にも関わってくるが、各銭湯の比較をするためである。その為に以下の事に気を付けながら調査をしていった。

①調査であることは伝えない

②自分からは話しかけない

③なるべく毎回同じ動線で動くようにする

①はお客さん同士の日常的な動きや自然な会話の中からコミュニケーションの要因となるものを見つける事が今回の調査の目的であった為、このことは伝えずにお風呂を入りに来たお客さんとして銭湯で振舞う事にした。

②はその場の特色を観察する為、私の自主的な行動によって場の空気やルールを壊さないようにする為だ。調査の中で、1 度自ら話しかけた事があったが普段話しかけてもらっているときのように話が進むことが無かった。場の参与者以外の行動が加わるとその場のありのままの様子が見えなくなってしまうので、挨拶以外で自分から話しかけることは無い様にした。

③は毎回同じような動線で動くことによって、銭湯内の場所の役割が見えてくるからだ。常連のお客さんのほとんどが毎回同じ場所のシャワーを浴び、同じような流れで入浴している。常連さんの中で「いつもあの場所を使うあの人」といった認識がされているので、私自身も動線を変えずに行動するようにした。

4.4 ログの収集・分析方法

銭湯内で起きたことをデータにする為に、観察したことをログとして記録した。記録項目は、調査した日にち、時間、銭湯、お客さんの数（私のいた時間帯に出入りした総数)、お客さんの層、銭湯内のどこにいたのか、誰が誰と挨拶や会話などをしていたのか、会話の内容である。データ化した中でキーワードとなる要素や出来事を抽出しそれによる両銭湯の各時間帯の傾向を編み出していった。参与観察の前半の大部分はランダムに選んだ時間帯でデータを集めていった。後半では、データを収集した上で見えてきた傾向や会話の要因と

考えられるものを上で見えてきた傾向や会話が生まれる要因であると考えられたものをまた、調査を行う中で特徴的なエピソードが起きた場合は、そのエピソードを項目ごとに記録しそれが起きた要因やそれと対応するエピソードを結び付けて銭湯内の社交性を見つけ出していった。

5　調査結果

ログを収集する上で 1 番初めに分かったことは、銭湯の場所だけでなく時間帯によって客層やコミュニケーションの量、質が全く異なることだ。井筒湯と玉の湯では立地や集客方針が異なる為客層やお客さんの量に違いがあり会話の量や挨拶の仕方、場の雰囲気にも違いが表れた。

＜井筒湯＞

井筒湯の早い時間帯＝客数はちらほらと少なく、高齢者がほとんど。挨拶や会話が無いこともある。

夜の時間帯＝客数は増え井筒湯の中でも一番人が多い。高齢者がほとんどだが、たまに若い世代の人も来る。6 時～7 時のあたりから常連さんが集まってきて、そこでの挨拶や会話は頻繁に行われる。

遅い時間帯＝客数は落ち着くが、高齢者がほとんどで毎日同じ常連さんが集まる。9 時過ぎには脱衣所でおかみさんと共に輪になって会話をしている事がある。

井筒湯では常連さんが挨拶をする際に、出入り口で全体に対して「こんばんは」「お先に失礼します」と声をかける傾向があった。シャワーの数も比較的少なく浴室内の面積も狭いため端と端でも話すことのできる距離間である。その為、シャワーの端と

端で会話をしたり、お互い離れた湯舟に入りながら話続けたりする人もよく見られた。

＜玉の湯＞

玉の湯の早い時間帯＝客数は多く、ほとんどが高齢者。常連の高齢者同士での挨拶や会話は頻繁に行われている。特に脱衣所で話している事が多く、湯上りの人これから入る人によって混み合う。

夜の時間帯＝客数は多く、高齢者も多いが若い世代や 40，50 代の方も多く利用する。常連の高齢者同士で挨拶や会話がなされている一方で、一人で淡々とサウナと水風呂を繰り返す人もいる。一人でいる人も挨拶だけしていたりする。また、友人同士で来る若者もちらほらといる。

遅い時間帯＝客数は落ち着き、客層も若い世代や 40、50 代の方の割合が増える。挨拶だけして各々お風呂に入る人が多い。若女将が入っている事もあり、その時にママ友と思われる人と話している事もある。

玉の湯では常連さんが挨拶をする際に、個人個人に向けて挨拶をする傾向があった。一日に来るお客さんの数が多く人の出入りが多い。シャワーで体を洗うと自分の荷物を脱衣所に持っていく人が多く、シャワーでもサウナでも場を譲るという意識を持った行動をとる人が多かった。

このように時間帯によって客層やそれぞれのお客さんが何を目的として来ているのか異なり、場の雰囲気にも違いがみられる為、ログを取る際も時間帯ごとに分けて記録していくようにした。井筒湯、玉の湯を時間帯ごとに分けそれぞれの特徴をログデータの中からキーワードを抽出していくと以下の表２のようになった。

表２　井筒湯、玉の湯の時間帯ごとの特色

	井筒湯			玉の湯		
	15～17時	18～20時	21～23時	15～17時	18～20時	21～24時
客層	主に高齢者	主に高齢者	おばさん2人 高齢者	主に高齢者	主に高齢者　30～40代や若者もちらほら	30～40代や若者、高齢者が混在
客数	少ない	多い	日による	非常に多い	多い	日によるが少な目
番頭さん	高齢者の女将さん 旦那さん	高齢者の女将さん 旦那さん	高齢者の女将さん 旦那さん	高齢者の女将さん 若い旦那さん	若い旦那さん、女将さん	若い旦那さん、女将さん
挨拶の量	高齢者が来るたびに挨拶あり	高齢者が来るたびに挨拶あり	高齢者が来るたびに挨拶あり	高齢者が来るたびに挨拶あり　30～40代の方が軽く挨拶をすることあり	高齢者同士でする事はあるが、全体的には静か	高齢者同士でする事もあるが割と静か　30～40代のママ友同士などで挨拶あり
会話の量	浴室内では会話は少ない	特定の高齢者を中心に会話が多い	おばさん2人を中心に会話が多い	非常に会話が多い	脱衣所やサウナでは会話が多い	会話は少ない
会話を回す存在(私の付けたあだ名)		75歳さんや白髪さん、先生	aさん、ちいままさん、ママさん	小さいおばあさん、お姉さん、ネックレスの人		
番頭さんとの会話	脱衣所でお客さんの話し相手に	脱衣所でお客さんの話し相手に	脱衣所での会話に女将さんが参加	あまり見かけない	あまり見かけないが、お風呂上がりの人と会話あり	あまり見かけない
私に対する態度	挨拶されれば返すが、干渉しない	挨拶されたら返す、話しかける事もある　知り合い同士の会話に夢中で気づかない事も	挨拶されたら返すが、干渉はしない	挨拶されたら返し、話しかける事もあり　知り合い同士の会話に夢中で挨拶に気づかない事も	挨拶されたら返すが、干渉しない	挨拶されたら返すが、干渉しない

6　考察

調査過程の中で、それぞれの銭湯の特徴や特定の行動が観察できた。挨拶や会話が有る日(時間帯)もあれば一言も会話のない日もありその違いを比較していくことでコミュニケーションの要因となる事柄、社交性による言動の様々な出来事が浮かび上がってきた。そこで見えてきた、「挨拶や会話が生まれる要因」と「常連さんによる新入りさんの受け入れ」を社交性やソーシャル・キャピタルの観点から考察していきたい。

6.1 挨拶や会話が生まれる要因

表 2 を見ていく中で二つの銭湯で共通している部分としては、客層は高齢者が多い事、高齢者が中心となって会話をしている事があげられる。会話の量項目を見ると銭湯内のお客さんの数が多い時間帯、特に高齢者の割合が多い時間帯に会話の量が増えている。つまり、挨拶や会話が多く生まれている場の特徴として、高齢者の多さというのが考えられる。そこでまず初めに、高齢者のお客さん同士が銭湯以外の場所で先に知り合いになっているから挨拶や会話をする関係性が出来ているのではないかと考えた。次に、銭湯独自の場で関係性は構築されていてその構築には「会話を回す人」の存在が大きく関わっているのではないかと考えた。

①銭湯以外の場で関係性が築かれそれが持ち込まれた可能性

自治会などの地域の交流で知り合いになっている人たちが銭湯でコミュニケーションをとっているのではないかと考えられる理由として２つの事があげられる。１つ目は、銭湯が地域に根付く施設であるからだ。先行研究であげた通り京都市は銭湯自体の数も人口に対する銭湯の数も他地域と比べ多く、井筒湯、玉の湯の周辺地区に住む住民がその銭湯に通っているのではないかと考えた。店舗前に止まっている自転車の数とお客さんの数を比べてみると自転車の数は少なく、このことからも歩いて来ることのできる距離に住んでいる人が多い可能性が考えられる。それぞれの銭湯は地域に根付くものであ

る為、自治会などの地域の交流に影響されるものではないかと考えた。2 つ目は、お客さん同士が個人の情報を良く知っていたからだ。常連さん同士が名前で呼び合っている事が多い。名乗る必要のない銭湯の会話をしているにもかかわらずお互いの名前を把握しているのだ。飲食店で働いているおばあさんに対し「ママ」と読んだり、他のおばあさんに対し「先生」と呼んだり、医療従事者の a さんに病気の話を聞いたりとお互いの職業も把握している。これらの個人情報を出さなくても銭湯での会話は成り立つがお互いに把握している。以上の 2 つの理由から、銭湯以外の場でコミュニケーションをする関係性が出来上がっていた可能性が浮かび上がった。銭湯内の挨拶や会話などの関係性は自治会などの地域の関係性と重なるのではないかと推測した。そこで京都の元学区の地域区分に着目し、元学区を単位とする自治会が人々の関係性を形成しているのではないかと考えた。井筒湯の所在する梅屋元学区は玉の湯の所在する柳池元学区と比べ人口は少なく高齢者の割合が高い。梅屋学区では新しく来た人と昔から住む人との関り方を課題としており、昔から住む人同士の古くからのつながりが存在すると考える事が出来る。

しかし、井筒湯の常連の方に聞き取りを行っていく中で、銭湯内でのコミュニケーションをとる関係性は銭湯内で生まれたものだという事が判明した。

75 歳の人は浴室で先生とご近所の人の話をしていた。
…（省略）…
私が浴室にいた人全員に挨拶をして退室すると、しばらくして 75 歳の人もみんなに挨拶をしてから脱衣所に来た。
そこで私は 75 歳の人に「銭湯の常連さん方はすごく仲良しに見えるんですけど、小さい頃からのお友達とかだったりするんですか？」と質問した。
75 歳の人はびっくりした表情で「そんな風に見える？」と聞き返してきた。私が頷くと 75 際の人は「今話していた人はここ 2，3 年で来るようになった人で、あの人（違う人）は 1 年前くらいから来るようになった」と説明してくれた。「あなたとも去年から話すようになったし、新しく来た人にも話しかけちゃうのよ私」と笑いながら話してくれた
その他の会話から、75 歳の人は他の人の家の方角はだいたいわかるが住んでいるところまでは知らないようだった。

ログ 1：12 月 7 日 19:30　井筒湯

また、玉の湯でも「以前は家の近くの違う銭湯に通っていたが、その銭湯が閉業し玉の湯に通うようになった」と話す常連の方や「家からバスで 5 停車場も離れている」と話すお客さんがいた。

以上の事から、銭湯内で見られるコミュニケーションをとる関係性は、生活上で構築されるその他の地域組織の繋がりによるものではなく、銭湯内で生まれたものである事が発見できた。

②「会話を回す人」の存在

調査を続ける中で、コミュニケーションをとる関係性は銭湯の中で生まれたという事が分かった。次は、どのようにして関係性が構築されてきたのか、関係性の要因について考察する。

まず、表 2 から見てわかる様に、自分から挨拶をするとほとんどの場合他のお客さんは挨拶をしてくれる。会話をしているお客さん同士は店内に入ると必ずと言っていいほど、挨拶をしている。また、私自身も「出来るだけ自分から挨拶をする」というルールが実行できた時に常連さんから話しかけられることがあった為、挨拶は会話をする関係性の形成に繋がりがあると考えた。そこで、会話をする関係性が築けているかどうかを確かめるために挨拶ができた人と会話が出来るかどうかを確かめてみた。

私が入店するとおばあさんが１人いて、私から挨拶すると笑顔で返してくれた。私は㋓の位置でシャワーを浴びた。しばらくするとおばあさんが入ってきて、目が合ったので挨拶をするとこちらも笑顔で返してくれた。入って来たおばあさんは㋜のシャワーにいたおばあさんとも挨拶をして㋐の位置についた。㋜と㋐のおばあさんは違う人の話をし始めた。
私が一人でサウナに行こうとマットを取りに行くと㋜のおばあさんが振り返ってちらりとみて来た。そのまま一人でサウナに入っていると、㋐の「おばあさんがお邪魔していい？」と声をかけて来たので「どうぞどうぞ」と返した。向こうから挨拶をしてくれていたのでいいと思い「最近通り雨多いですね」と話しかけた。すると㋐のおばあさんは笑顔で頷き下を向いた。私は、「湿気も多くて大変ですね」と話を続けようとするも完全に無視された。その後、私が「失礼します」と言って出ると頷くのみ。㋐のおばあさんはサウナを出ると㋜のおばさんと笑顔で話し始めた。自分の時とは態度がだいぶ違うと感じた。

ログ２：７月２日 16:00　井筒湯

ログ２では自分からの挨拶が成立し、相手からの挨拶の一言があり挨拶をする関係性が形成されていたのにも関わらず、相互に会話をする事が出来なかった。他のお客さん同士では頻繁に会話が行われていた一方で、新入りの私とは会話が成立しなかったのだ。このことから、会話ができる関係性は挨拶ができる関係性の基にはなっているものの、挨拶ができる関係性は必ずしも会話ができる関係性と重なるわけではないという事が見つけられた。挨拶はコミュニケーションをとる関係性を形成する要因の一部ではあるが、他にも要因はあると考えられる。

次に、表２を見ると会話が多い時間帯の所には代表的な「会話を回す人」が存在することが分かる。「会話を回す人」というのは、その場でほとんどの人と挨拶する人、その人が中心となって会話が成立している人、１対１だけでなく周りを巻き込んで会話をする人の事である。表２の「会話を回す人」は、時間帯をランダムに選び調査をしている中で見られた、その場の中心人物である。本名は知らないため、周りから呼ばれているあだ名や私が仮に付けた名前で表記してある。

私がサウナに入ろうとすると中には3人の人がいた。
一番奥におばあさん、その隣に30代くらいの人、その隣におばあさん
入った時は30代くらいの人と手前のおばあさんが隙間を開けてくれた。奥の人とと30代の人がお店の話をしている。そのあと小さいのおばあさんが入ってきて床に座る。お姉さんが一度出ると特に会話することはなくなり、戻り際に30代の方も出た。お姉さんとちいさいおばあさんで体の話をしていた。手前の方も私も一度上がり、私が水風呂に凍えていたら手前にいた方に笑われた。私は「冷たい」と耐えながら言ったらその人は微笑んでくれた。
小さいおばあさんが出て戻ってくる際に、手前のおばあさんと私に氷を配ってくれた。手前の方は何も言わずに受け取ったので、私もありごとうございますと言って受け取ったが、さも当たり前のような感じだった。
私とその二人以外は上がった、その後お姉さんと30代の方が料理の話をし、おばあさんも上がった。
…（省略）…
サウナを出て脱衣所に上がると細身のおばあさんが着替えていて、特に会話をする事はなかったが出際にさよならと声をかけてくれた。

ログ３：6月18日15:30　玉の湯

この時、普段からその時間帯で他の人との会話を頻繁に行っている“お姉さん”と“小さいおばあさん”は自分とは違う世代の人にも話しかけ、話しかけられた方も楽しそうに会話していた。“小さいおばあさん”が、サウナに入っているという共通点しかない私に対し分け隔てなく氷を配っていた。そういった会話を回す人の行動を見て、他の常連さんが私に話しかけるなど会話をする機会が生まれていた。

入店すると脱衣所の端でおばあさんが帰り支度をしていた。私から挨拶すると笑顔で返してくれた。
私が浴室に入ると 2 人のおばあさんが浅風呂と深風呂にそれぞれ入っていて、私から挨拶すると 2 人とも返してくれた。
私は㋓の位置でシャワーを浴びる。
㋕のおばあさんが荷物をまとめて帰るときに、もう一人の人と私にお先に失礼と言って出て行った。
しばらくすると 75 歳の人が入店しすぐに着替え浴室に入って来た。
75 歳の人と私は挨拶し、75 歳の人は「久しぶりやね」と言ってきた。そのまま㋐の位置につくと㋖のおばあさんと挨拶をし、少し会話をしていた。
私がサウナに入っている間に㋖のおばあさんは帰った。
また新しいおばあさん(若め)が入って来て、75 歳の人と挨拶し私と会釈し、㋖の位置についた。
私が電気風呂に入っていると、75 歳の人も入って来て、電気風呂の気持ちいい位置について教えてくれた。私は電流が強過ぎて端まで行けないが、75 歳の人は慣れた様子で入っている。私の就活が終わった話や京都の生活があと少しだという話をした。
しばらく 2 人で話していると、泡風呂にいた㋖の人と目が会い、私がニコッとすると向こうは「2 人で電気風呂浸かってるの楽しそうだね」と言った。
75 歳の人は「一緒に入ろうよ」は㋖の人は「私電気風呂苦手やねん」と言い、75 歳の人は「入り方気をつければ全然いけるよ、なぁ？」と私にも会話を振ってくれて、3 人で話すことができた。
㋖は荷物をまとめて私たちに挨拶をしてから帰って行った。
私は水風呂に浸かりながらシャワーを浴びる 75 歳の人と、京都の観光地の話をした。
しばらくすると白髪の人が入って来てクの位置に着き 75 歳の人と白髪の人は話し始めた。私は 2 人に向かって「失礼します」と言うと 2 人とも「またね」と返事をしてくれた。
更衣室にはさっきの㋖の人がいて、「独占してごめんな」と言って扇風機をこっちにも向けてくれた。

ログ 4 ：10 月 15 日 16:45　井筒湯

この日は、会話を回す人の存在である“75 歳の人”と“白髪の人”が来店していた。75 歳の人は来店するなり、居る人みんなに挨拶をし軽く会話をしながら自分の定位置につい

て入浴した。この日に限らずとも 75 歳の人は毎回みんなに挨拶をし必ず誰かしらと会話をしている。また、75 歳の人が私と会話をし、その様子を見た他の常連の方も会話に参加してきた。75 歳の人がいないで脱衣所でも他の常連さんと会話を成立させる事が出来た。75 歳の人は私と他の常連の人を巻き込んで会話をする事が多く、その場にいる人の会話をする関係性の範囲を広げ会話をまわしているのである。

その他の「会話を回す人」も同様に、その人を中心として会話が成立していたり、他の人と他の人が話をするきっかけになっている。これらの事から、コミュニケーションをとる関係性の形成には、挨拶をするという行為と「会話を回す人」の存在が要因となっている事が分かる。

6.2 常連さんによる新入りさんの受け入れ

私自身も調査を続ける上で、話しかけられたり常連の方に顔をおぼえてもらったりした。新入りであった私も常連さん達と挨拶や会話をする関係性を構築できたのだ。新入りさんであった私に対する常連さん達の態度の変化とその要因について考察していきたい。

両銭湯の各時間帯にはそれぞれの関係性が出来上がっている。そこでは、常連さんはシャワー台を超えて会話をしたり、人を挟んで会話することがある。このことから常連さん達にとって特定の時間帯の銭湯は自身の「場」であるという事が分かる。新しく来たお客さんは必然的に場の外にいる状態になり、その場に新入りのお客さんがいたとしても常連同士の会話を続ける。新入りさんにも他の常連さんに話すように話しかけてくる常連さんもいれば、こちらがした挨拶を無視し会話をしたがらない常連さんもいる。常連さんにとっての銭湯にはソーシャル・キャピタルが存在していることが分かる。「強固な互酬性が存在し、行動ルールが守られ、双方向の義務を持った集団は、不信がみられる集団よりも効率よく活動する事が出来る」とあるように、常連さん達の行動の中には互酬性と一定の行動ルールがあった。互酬性のある相互作用を行い、ルールを守

った行動をするという事が新入りさんが受け入れられる要因になるのだ。

新入りさんが常連さん達に受け入れられるのには大きく分けて 2 種類のルールが関係していた。1 つ目は、関係性を形成する為にどこの銭湯でも共通する『ユニバーサルルール』。2 つ目は、その銭湯に通う人、個人的に行っている事に関係する『ローカルルール』である。

①ユニバーサルルール

ユニバーサルルールとは普遍的な行動様式であり会話をする関係性を形成する上で守られているルールである。本調査の中では、「自分から挨拶をする事」が共通して存在するルールであった。必ずしも銭湯に入ったら挨拶をしなければならないという決まりがあるのではなく、会話をする関係性を構築する為に守られているルールという事だ。ソーシャル・キャピタルが存在している銭湯という場は互酬性を保証されており、「挨拶をしたら挨拶が返ってくる」という相互作用が当たり前になっている。表 2 の私に対する態度の項目で見られるように、私から挨拶した場合はほとんど挨拶をし返してくれる。このことは井筒湯でも玉の湯でも共通しており、挨拶をする事がユニバーサルルールである事が分かった。

実際に、「自分から挨拶する」というルールがが会話を生んだ例としてログ 5 のような関係性の広がりを見る事が出来た。

私がサウナに入ると“お姉さん”とおばさんがお店の話をしていた。私が挨拶をすると二人とも笑顔で返してくれた。おばさんがサウナを出てお姉さんと二人きりになり、「ここのサウナは熱いですね」と話すと笑顔で会話を続けてくれた。そのまま、私が大学生である事や出身が京都ではない事を話していると、「ここの銭湯の事はわたしになんでもきいて」と言いお風呂のおすすめの入り方やお風呂の水は地下水だから飲める事、いつも同じ時間帯にいるという事を聞いた。
私とお姉さんが話している間に、先程出ていったおばさんがサウナに戻ってきて、お姉さんがサウナを出ると私に話しかけてくれた。週に一回通っている。以前は違う銭湯に通っていた。「銭湯にはルールや自分の場所などがあり煩わしかったが、ある日『ここお姉ちゃんがいつも使ってる場所よね』と常連の方に言われ、それから銭湯が好きになった」と言っていた。
　玉の湯では同じ時間帯に来る人とお友達になりコロナ前はみんなでご飯に行ったこともあったそうだ。

ログ５：11 月 11 日　18:00

②ローカルルール

　ローカルルールとは銭湯単位、個人単位で会話をする関係性を形成する上で守られているルールである。銭湯単位のルールも銭湯側が打ち出しているルールではなく、銭湯に通う人が快適に利用する為に出来たルールである。ローカルルールはユニバーサルルールに比べより一層場や個人に近いルールである。井筒湯では、「㋐の位置や㋑の位置などの端にあるシャワーを常連さん達は使う。後から来た常連さんに端のシャワーを譲る。」であったり、玉の湯では「自分の荷物を脱衣所に一度戻しに行く。」といった行動をする人が多く、このようなルールが暗黙の了解として存在している。

　ユニバーサルルールを守っても会話をする関係性を十分に築けなかった人が、ローカルルールを守ったら会話をする関係性を築く事が出来た事もある。井筒湯では、“75 歳の人“、”白髪の人“は積極的に新入りさんに話しかけていたが、”a さん“、”ちいままさん“、”ママさん“は新入りさんとは会話をする関係性を築こうとしていなかった。そこでここでは、井筒湯における新入りとは壁をつくる常連さんと私の関係性の変化を見ていきたい。

a さんとちいままさんがシャワーをしながら近所の住人の話をしている。
私がサウナに入るとタオルで口を抑えたちいままさんが入ってきた。ちいままさんはしばらくしてから私に「ごめんなんやけどお姉さん口にタオルまえてくれへん」と言ってきた。
私もはいと言ってタオルを巻く。
私がサウナを出てちいままさんも出るとちいままさんは「お姉ちゃんごめんな。悪気はないねん」と声をかけてきた。
周りもどうしたの？っていう雰囲気になった。そのあともちいままさんは a さん達と話をし続けた。

ログ 6 ：8 月 31 日 21:00　井筒湯

私が浴室に入ると先生が蛇口の所に、ママさんは⑦の位置にいた。先生はこちらを見ていたので私から挨拶すると先生は挨拶し返してくれた。ママさんは全体に挨拶をしてから退室した。
背の低いおばあさんが入室してきて先生に挨拶してから⑦の位置についた。そこで洗面台越しに先生と寒さの話をしていた。
しばらくするとちいままさんが浴室に入ってきた。私はサウナにいたので、私以外の全員に挨拶した。（サウナの中では私はタオルで口を覆っている）その後もいつものようにちいままさんは他の人と話続けていた。
私がサウナから上がり、シャワーを浴びて水風呂に入っているとちいままさんも水風呂に入ってきた。ちいままさんが「ちょっと失礼」と言ったので、私は「どうぞどうぞ」と言った。そうするとちいままさんは私の顔を見て「水風呂肩まで入れないの？」と笑いながら聞いてきた。私は「無理です。だから（あなたが）すごいです」と答えると、「いつもサウナ入ってるのにね」と言ってみ水風呂を出た。

ログ 7 ：11 月 21 日 18:30　井筒湯

ログ 6 の中でちいままさんに一度指摘された「サウナの中では口を覆う」というルールは玉の湯では存在せず、井筒湯も他の時間帯ではみんながしているものではない。この時間帯に集まる人のローカルルールなのである。その日は私はちいままさんに挨拶をしていなかったが、「サウナでは口を覆う」を行動していた私を見て以前は話しかけるような関係性ではなかったのに話しかけてきた。私がその場のローカルルールを守ったから、常連

さんに受け入れられたと考えられる。

また、“ママさん”は私の挨拶を無視したり私と話している常連さんには話しかけるが私をスルーする行動を長い期間とっていた。しかし、私が“ママさん”個人のルールを守ったことによりママさんの方から話しかけてくることがあった。

私がサウナに入っているとママさんが浴室に入ってきた。ママさんはいつも浴室に入ってからサウナのドアを開け、軽く体を洗ってからサウナに入る。その為、私はママさんが浴室に入ってきた時点で、サウナのドアを少し開けた。 ママさんは体を洗うといつものように「お邪魔するで」と言ってサウナに入ってきた。私が「どうぞ」というと、ママさんの方から「外は寒くてかなわんな」と話しかけてきた。私もそれに返事をするとそのまま天気の話をし続けた。ママさんはどんな仕事をしていいるのかと私の個人的なことも聞いてきて、私が外で働くバイトをしている事、大学生である事を話すと興味を持ってくれた。

ログ 8：12 月 20 日 19:00　井筒湯

新入りとは特に交流しようとしていなかったママさんが話しかけてくることが一度もなかったのにも関わらず、あたかも前から話していたかのように話しかけてくれた。私を受け入れてくれた要因として考えられるのは私の「サウナのドアを少し開けた」という行動である。私はママさん個人の動線を知っていたためそれに合うように動いたことがママさんの話しかけるという行動に影響したのだろう。私の行動がママさんにとって利益のある行動だったため互酬性を感じ会話をする関係性を形成してくれたのだ。

5　おわりに

庶民の社交場ともいわれている銭湯で、お客さん同士が挨拶や会話をしている姿はどの銭湯でも見る事が出来る。同じ時間帯に同じ銭湯に来るといった共通点から、常連さんにとっては日常と言える会話のできる関係性が築き上げられている。近代化による個人主義と親密圏の変容により現代社会は無縁社会と化し、中間集団の崩壊が指摘されている中、銭湯は未だに中間集団として地縁を繋ぐ役割を果たしている。京都市内の 2 か所の銭湯を参与観察していく中で、銭湯内での挨拶や会話などのコミュニケーションをとる関係性がどのように生まれたのかを調査してきた。一見、地域の他の集団でできた繋がりが銭湯に持ち込まれているように見えるが、銭湯でお風呂に入るという行為の中で生まれたものだった。会話の有無の要因となる「会話を回す人」の存在があってこそ常連さんの関係性が築き上げられている。それに加え、「会話を回す人」の存在により新入りであった私が他の常連さんと話す機会が生まれ徐々に常連の方と場を共有する事が出来るようになった。個人的に京都に住む方はよそ者に厳しいといったイメージを持っていたが、よそ者の私に設備や備品の使い方を教えてくれて受け入れてくれた。ソーシャル・キャピタルの観点からも銭湯内の関係性の形成が社会的な現象である事が分かった。また、銭湯が社交の場として成立する要因が実際の事例から読み取ることができた。「一番端のシャワーは譲る」といったような初めて来た人には一見気づかないような「暗黙のルール」がその場には存在している。そういった様々な「暗黙のルール」は共有され、その場の参与者が「思慮と様式化」を行っているからこそ、人と共にいる事そのものを銭湯で楽しんでいたのだ。

調査を開始した 1 か月目の時点で何回か話たり、顔見知りになった常連さんもできた。約 1 年通ったことによりいつも会う常連さんと話したいという社交の根本と言えるものが形成されていた。転居してきてから日常生活で挨拶をすることが少なかった私にとって、挨拶がおこなわれ初めての人もしやすい場というのが新鮮に感じられた。初対面の人にも話しかけたり、気にかけたりする人がいる。そういった意味では銭湯は関係性や社交性を形成しやすい場であると感じた。銭湯は中間集団の縛りが薄れる現代において代表的な地縁の

繋がりを形成できる社交の場である。

最後に、本調査を行うにあたりお話を聞かせてくださった井筒湯、玉の湯の常連の方々にこの場を借りて心からお礼を申し上げます。

［参考文献リスト］

・橋本剛,2005,『ストレスと対人関係』ナカニシヤ出版.

・浦光博,1992,『支え合う人と人―ソーシャルサポートの心理学―』サイエンス社.

・小林章雄,1997,『ソーシャルサポート研究における今日の諸問題』日本行動医学会,1997年 4 巻 1 号 p.1

・Kaplan,R.M. ,1985, Social support and social health : Is it time to rethink the who definition of health. In I. G. Sarason & B. R. Sarason, Social support : Theory, research and applications.MartinusNijhoffPublishers.p.95-113 .

・ Cassel.,J. ,1974, Psychological processes and “stress” : Theoretical formulations. International Journal of Health Service, 4, 471-482.

・Cobb, S. ,1976, Social support as a moderator of life stress. Psychosomatic Medicine. 38. 300–314.

・Cohen,s.,& Wills, T.A.,1985, Stress, social support, and the buffering hypothesis.

・House J, Landis KR, Umberson D. ,1988, Social relationship andhealth. Science 1988; 241: 540-545.

・Giddens Anthony, 1991, Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Modern Age, Cambridge: Polity Press.

・Simmel, Georg, 1917¡1999 Grundfragen der Soziologie, Gesamtausgabe 16, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag: 61-149. （清水幾太郎訳,1979,『社会学の根本問題』岩波文庫.）
・石田光規,2011,『孤立の社会学　無縁社会の処方箋』勁草書房.
・黒田由彦,2013,『ローカリティの社会学　ネットワーク・集団・組織と行政』ハーベスト社.
・奥田道大・和田清美編,2003,『福祉コミュニティ論　第二版』学文社.
・町田忍,2016,『銭湯　―「浮世の垢」も落とす庶民の社交場―』ミネルヴァ書房.
・田村豪,2020,『「社交性の社会学」序説：G・ジンメルと E・ゴフマンにおける社交論の境界』社会学雑誌,37:175-192.
・厚生労働省,『公衆浴場法概要』,厚生労働省生衛業対策のページ.
・厚生労働省,2021,『公衆浴場数，公－私営別；許可・廃止・処分件数，都道府県－指定都市－中核市（再掲）別』令和元年度衛生行政報告例.